

たいよう

わたしのおとうさんは、いちねんじゅうまつくろに、ひやけをしてる。それは、あついときもさむいときもかぞくのために、がんばってしごとをしているからだ。おとうさんのしごとは、あきからはるにかけてとてもいそがしくなる。わたしがねているあいだにかえってきて、あさはやくしごとにでかけてしまう。いつしゅうかんじよう、かえってこれないこともしょっちゅうだ。そんなときは、

「ばばにあいたいな。おともだちのおとうさんは、いつもいっしょにいれていいなあ。」

と、おもしろい、とてもさみしいきもちになる。でも、おとうさんは、しごとのあいたじかんをみつめて、でんわしてくれたりかぞくのかおをみにきてくれたりする。わたしは、そのじかんをとてまたのしみにしている。

「ただいま。」

と、こえがきこえると、わたしといぬにひきはだだだどとげんかんへとはしり、そして、いっせいにおとうさんにだきつく。みんなおとうさんがだいすきで、いつもとりあいになるのだ。

「おかえりなさい。ばばつかれてない。」

と、きくと、

「つかれていたけど、あやかのかおをみたらげんきになったよ。ありがとう。」

と、えがおでこたえてくれる。すこしのじかんでもおとうさんにあえると、さみしかつたきもちもふつとび、わたしもげんきになれるのだ。

いつもはなかよしのおとうさんと、ときどきけんかをしてしまう。そんなときは、

「ばばなんか、だいきらい。」

と、おもしろい、くちもきかなくなる。でも、いつのまにかけんかしていることもわすれて、ふたりでわらっている。わたしのおとうさんは、なかなかおりのてんさいなのだ。

おとうさんのまわりは、いつもえがおやわらいこえでいっぱいあふれている。おとうさんは、みんなのこころをあたたくしてくれる、たいようのようなひとだ。

だいすきなおとうさん。

つかれているときやこまっているとき、こんどは、わたしがおとうさんのたいようになるからね。いつも、ありがとう。

根本 紋歌